

日本初の都市の出現 纏向遺跡を歩く 2012.7.24 & 8.23.

三輪山と巻向山の谷間から流れ出た巻向川の扇状地に位置し

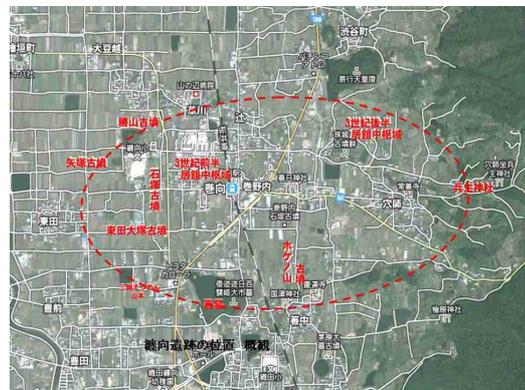
邪馬台国の王都?? と騒がれた纏向遺跡

また 北部九州と結んで 大和で いち早く本格的鍛冶をはじめた遺跡でもある



纏向古墳群 石塚古墳から眺める巻向 中央正面の家並の後ろが巻向駅のあたり

1. 纏向遺跡 日本における都市の初現 の概要
2. 邪馬台国の王都?? と騒がれた大型特殊建物群跡と纏向古墳群を見て歩く 2012.7.24.
桜井線の西側 3 世紀前半の纏向中枢地区大田地区と纏向古墳群のある東田地区
3. 鉄をキーワードに纏向遺跡の謎を探る 纏向再訪 walk 2012.8.23.
纏向遺跡全体を眺め 人工都市の意味と鉄の役割実感



卑弥呼の墓といわれる箸墓よりも早くに築かれた纏向型と呼ばれる出現期の方後円墳群が3世紀卑弥呼の時代まで溯れるといわれ、箸墓が卑弥呼の墓である信憑性も強まって行く中、2009年11月 纏向遺跡で「卑弥呼の宮殿」と大騒ぎになり、にわかに邪馬台国大和説がもてはやされた。また、鉄の歴史視点から見ると、卑弥呼の邪馬台国連合のつながりは「北部九州に対抗した朝鮮半島の鉄の覇権」との説も提案され、話題を読んでいる。

時は3世紀前半古墳時代前期。日本各地に諸国が生まれ、邪馬台国連合から大和王権へと日本が大きく変化してゆく時代であり、実用鉄器が国づくりに大きくかかわってゆく時代といわれる。

当時の北部九州の先端技術 高温本格的鍛冶とつながると考えられる鞆のかまぼこ型羽口や鉄滓そして大量の実用鉄器(鋤)がこの纏向でも出土し、畿内でも一番早く北部九州の先端技術が入ってきていると見られる。

一方 纏向では 大規模な土木工事による土地改良・日本各地からの人の流入 そして前方後円墳という巨大墳墓が築かれ、宮殿を思わせる計画的な大型建物も出土し、新しい古代都市出現の体をなしている。

しかし、纏向遺跡では 農耕の痕跡・竪穴住居群の集落がまだ出土せず、人の影が見えない。

この新しい都市での暮らしの実体がみえてこないのです。

鉄についても北部九州の先進鍛冶技術が流入し、土木工具「鋤」に特化した実用鉄器が出土する以外にほとんど他の鉄器はない。しかも、厚い大型鉄器である土木工具が出土するにもかかわらず、鍛冶工房跡もまだ見つかっていない。鞆羽口など鍛冶具が幾つも出土することから、鍛冶工房があったことは間違い無いと思われるのですが・・・

邪馬台国論争の渦中にあるに纏向遺跡。でも まだ遺跡には未解明の数多くの謎がある。

これらの解決なしには、論争に決着が付けられそうにないばかりか、「日本の幕開け」古墳時代の到来を明らかにすることができない。また、日本で製鉄が始まってゆく過程を知る上でも この纏向の鉄の解明はおもしろい。

纏向遺跡にはまだ10%にも満たぬ発掘調査が原因かもしれないが、謎が多い。

纏向はもう何度も歩いたことがあるのですが、纏向遺跡を全体として眺めたことがなし。

「卑弥呼の宮殿跡も見てないなあ」 また、箸墓やホケノヤマ古墳はしているが、纏向の西側の端にある古墳群にはいないなあ・・・と。

先日この纏向遺跡のすぐ北側 物部氏の根拠地 布留遺跡を歩いて、初期ヤマト王権時代の鉄の印象が自分の抱いていたイメージと随分違う。また、この布留遺跡よりも更に時代の古い纏向遺跡に布留遺跡にはない九州の先端鍛冶技術が入っていた可能性を知りました。今一度 纏向遺跡をゆっくり 歩きたくて 7月24日と8月23日 夏の暑い日でしたが、真っ黒になって 纏向めぐりをしました。

まだ 何も謎は解けませんでしたが、纏向遺跡はまだ謎の面白い遺跡 景色はいいし、ゆったりと歩いて 古代のロマンにイメージを膨らませるのにはうってつけ。

「纏向遺跡の人の顔が見えないのですが…… また、鉄器ももっと出てませんか??」と

訪ねた桜井市埋蔵文化センターで「我々も本当に不思議なんです、

集落跡がでていません」と聞いて 頭の中すっきり。 纏向はまだまだ 古代のロマンを掻き立てられる場所。

わたしの妄想ですが、縄文人が作ったストーンサークルの古墳時代前期版が纏向では????と……

「この時代 まだ 祀り 祭祀が国を治めてゆく基本であったろう

纏向は扇状地全体が連合諸国共同の宮殿-祭祀の場で、一般人が足を踏み入れなかった禁則の場だった。

そのとてつもない大きさが見えず 人の姿がみえないのでは・・」

これが本当なら人工都市の謎もとけるし、スケールの大きさはすごい まだまだ 面白いことがありそうな纏向

また、引き続き 通って見たい場所 穴師の鉄も もっと調べてみたい。

そんな今回の纏向 walk 遺跡全体をきっちり端まで歩いて 纏向の今の景色を抜けのないよう記録しておこうと。

写真枚数が多くて 大部になりましたが、デジカメの記録写真とご理解ください。

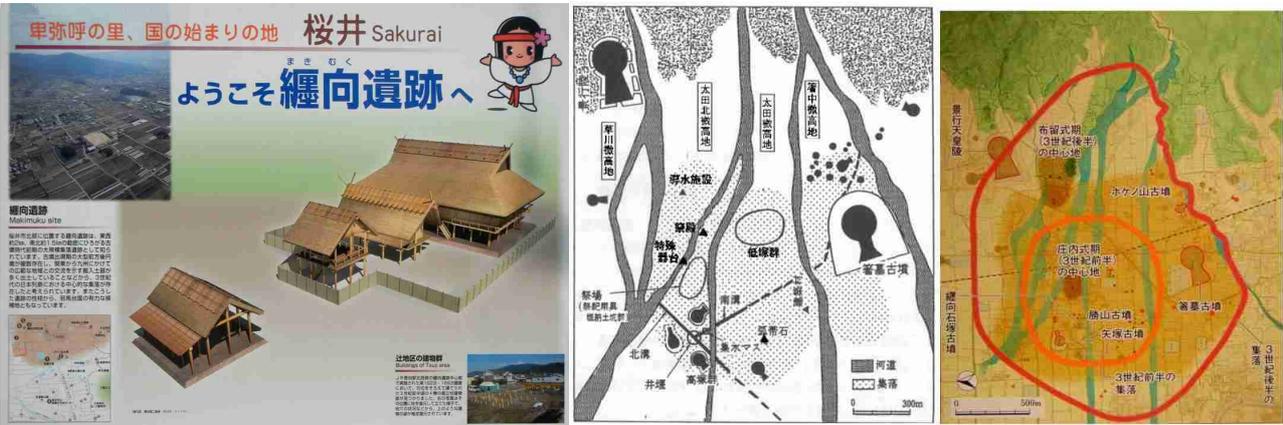
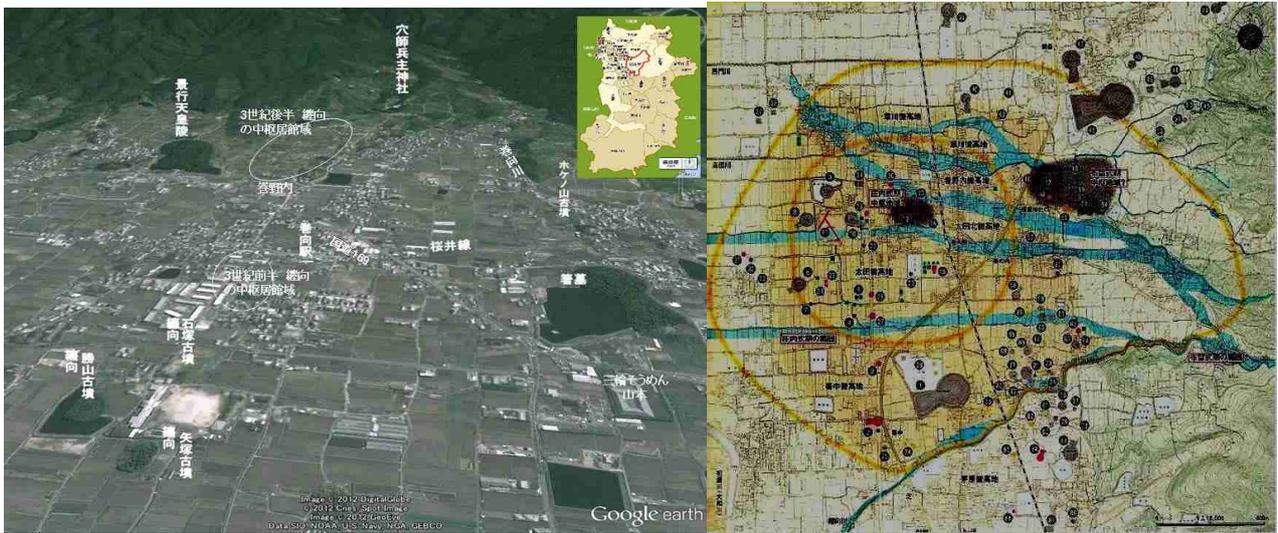
もう 夏も終わり 纏向の空にも赤とんぼがゆっくり 舞っていました。

2012.9.5. by Mutsu Nakanishi



纏向遺跡 ※本図はイメージ図であり、必ずしも考古学的調査、資料に基づいたものではありません。

1. 纏向遺跡 日本における都市の初現 の概要



桜井市の三輪山の北西麓一帯桜井市太田、辻、東田にあり、初瀬川の支流である巻向川が形成した扇状地上に立地する弥生時代末期から古墳時代前期にかけての遺跡。遺跡の範囲は東西約2km・南北約1.5kmと広大で、これまでに大規模な建物跡や水路などの遺構が見つかったのに対し、当時の日本各地の集落に形成されている竪穴式住居跡が見つからぬことや、北九州から関東地方までの土器や遺物が出土することなどから、日本各地の交易の拠点になっていた日本初の人工都市と考えられ、邪馬台国やヤマト王権との関係が取り沙汰されている。

檀耆研の寺沢薫氏や桜井市教育委員会の橋本輝彦氏はこの纏向遺跡を「日本における都市の初現」だという。

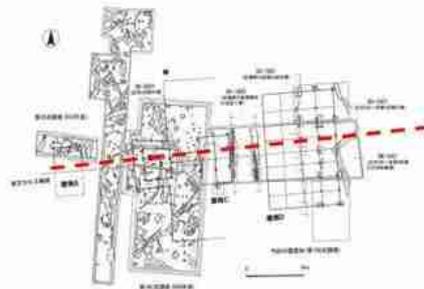
西に位置した東田地区からは土器や木器の入った40基近い土壌、掘立柱建物跡、溝などが見つかり、飛鳥・奈良時代の河道からは銅鐸の飾耳片も出土した。東にある辻地区には幅5m、深さ1mの人工の溝が2条あって途中で合流し、そこに井堰が設けられていた。矢板を打ち込んで護岸した部分や、集水マスを作った所もあり、溝からは古墳時代初頭の土器が多量に出土している。・・・

また、この遺跡のあちこちから、数多くの鉄器（主に鋤）や鉄斧・靱羽口が出土し、この纏向の居館に付随する鍛冶工房があったと考えられている。特に東田地区勝山古墳の西の周堤周辺からは北部九州のかまぼこ型羽口が出土し、畿内ではいち早く当時の先端技術であった北部九州の高温鍛冶技術がこの纏向に持ち込まれていることや出土する鉄器のほとんどが農耕具ではなく、土木工具の「鋤」であることはこの纏向遺跡の性格を考える重要なポイントであろう。

遺跡内には最古級の前方後円墳など20数基の古墳が点在しており、なかでも箸墓古墳は卑弥呼（あるいは台与）の墓とする説がある。また、現状から前方後円墳と判別できるものとして、箸墓古墳、纏向石塚古墳・矢塚古墳・勝山古墳・東田大塚古墳・ホケノ山古墳があり、これらの古墳を総称して「纏向古墳群」といい、まだ築造時期が確定されたものはないが、近年の檀原考古学研究所や桜井市教育委員会等々の発表によれば、箸墓古墳よりも古いとされる勝山古墳、矢塚古墳、ホケノ山古墳、マバカ古墳などは出土物の調査等から建造時期が3世紀半ばまで遡るとされ、卑弥呼活躍の時期と一致するとの説もある。

さらに、2009年11月 巻向駅の北端の線路をはさんで北西側（纏向太田・辻地区）から3世紀前半の大型建物跡（柱穴）や凸字形の柵が見つかり、過去に見つかった建物跡とあわせ、3棟が東西に整然と並ぶことも確認された。

当時、方位に合わせて計画的に建てられた例は極めて珍しく、「卑弥呼の宮殿出土」とセンセーショナルな報道が踊り、邪馬台国畿内説に弾みをつけた。



2009年11月 巻向駅のすぐ北西端 太田・辻地区で見つかった卑弥呼の宮殿跡??と注目された大型掘立柱建物 纏向遺跡は西暦200年頃に出現。その大きさは直系1Kmの円状の区域で、地図の赤枠で囲った文字「庄内式期の範囲」が示すオレンジ色で囲まれた範囲で、2009年発掘された大型建物跡はこの区域の中心部「庄内式期の中枢地域?」と表示された部分にある。250~260年頃になると、赤枠で囲った「布留式期の範囲」が示すオレンジ色の範囲(およそ2.5Km x 1.5Kmの区域)まで拡大する。この拡大期とほぼ同じ時期に今回発掘された大型建物などはこの場所からはなくなってしまふ。その移設先は「布留式期の中枢地域?」と表示された地域であろうと推定されている。

しかも、桜井市教育委員会 橋本輝彦氏によれば、「この時期は箸墓古墳が築かれた時期と合致する」とされていて非常に興味深い。この「布留式期の中枢地域?」は縄文時代末期に大規模な土石流があったことが確認されており、荒地で弥生時代の遺跡はほとんど出土していない。この不毛の地に纏向遺跡が成立する200年頃は大和盆地最大の環濠集落である唐古・鍵遺跡が消滅する時期とも重なっている。

仮に、この区域を「都」であったと仮定すると、後の飛鳥京よりも広く、藤原京(5.5Km四方)に次ぐ大きさになります。しかも、この地域は建物のあったあたりを尾根とする南北に緩やかな傾斜地であったものを平に造成したことも判明している。(http://pub.ne.jp/luckfield/?cat_id=122847 より)



古墳時代の幕開け 纏向古墳群

石塚古墳	藤山古墳	矢塚古墳	東田大塚古墳
------	------	------	--------

◎ 石塚古墳の規模をみると全長96m、後円部径64m、くびれ部幅15~16m、前方部長さ32m
 藤山古墳 全長115m、前方部48mの非纏向型
 矢塚古墳 全長約98m、後円部径約54m、後円部高さ5m の纏向型
 東田大塚古墳は(全長120m、前方部95m)で前方部が長く非纏向型。

纏向型古墳 後円部と前方部の長さの比=2:1
 前方部に比べ後円部が大きくて高く 前方後円墳のさきかけ(出現期の古墳)
 纏向型ともわかれていた藤山古墳の形状が非纏向 同様に纏向古墳群に属する東田大塚古墳も非纏向

纏向古墳群 出現期の古墳の形状

日本における都市の初現-纏向遺跡

「纏向遺跡では竪穴式住居は全く出土せず、平屋建の建物ばかりが出土。また、水路と見られる深い溝と柵・中心的大型建物。そして日本各地から搬入された土器。そして居館に付随したベニハナ・鍛冶・木工の工房の存在などを総合すると巻向川が流れ出る扇状湿地を改良した人工都市の出現をうかがわせる」といふ。

また、この纏向遺跡から出土する鉄器の主な農耕具の「鋤」でなく、「鋤」であること、また、出土した鍛冶遺物で注目すべきは、当時、北部九州にしかない、高温の鍛冶技術がこの大和では始めて、この纏向遺跡に持ち込まれている。
(輪のかまほこ型羽口・高温溶融鉄滓・一部鉄器に高温鍛造の痕跡)

橋本輝彦「日本における都市の初現 纏向遺跡の調査から」より <http://mwuidir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/2741>

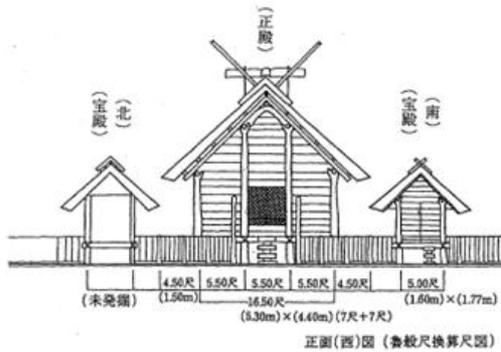
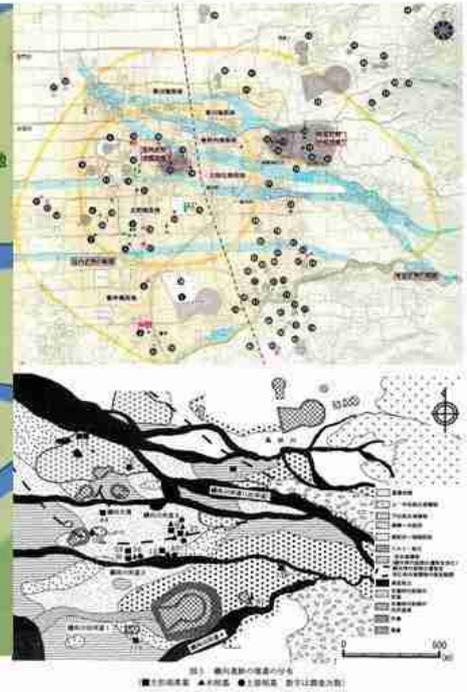


図7 太田地区検出の特殊建物復元案 (第20次)

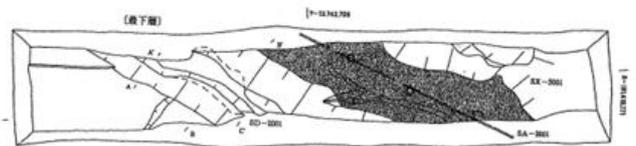


図8 尾崎花地区のV字溝と土壁・柵列 (第80次 1/100)



図9 家ヲラ地区平面図 (第50・90次 1/200)

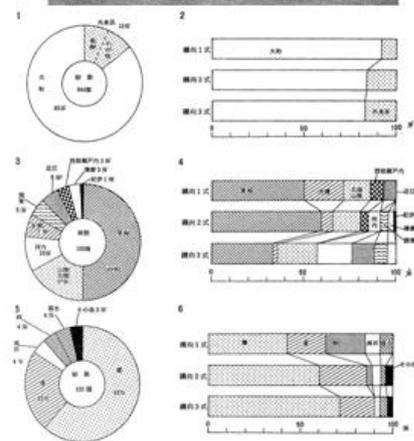


表1 纏向遺跡出土外地系土器の比率

纏向遺跡の諸遺構・遺物が示す都市機能

大型建物・平屋建住居 柵・溝・搬入土器

運河とおぼしき大溝

昭和46年に、幅5m、深さ1m、長さは南北200mにわたった運河とおぼしき大溝が発見された。溝には 板を敷き、護岸工事をする高度な技術も施されている。発掘された溝は一部であるが、溝を延長していくと 一方は初瀬川に、もう一方は箸墓に伸びていると言う。幅5m、総延長2600mの大溝が遺跡内を人字 形に通じていて、ヒノキの矢板列で丁寧な護岸工事がなされ、集水施設もつくられていた。大溝や導水施設といったインフラを備え、整然と区画された都市らしい機能をもった遺跡が、突如出現するのはこの遺跡における謎。



纏向遺跡で発見された大溝。板で護岸工事をしている。(写真/奈良県立橿原考古学 研究)



日本における都市の初現-纏向遺跡



尾崎花地区の区画溝 (桜井市大字巻野内)

第80次調査では布留0式期から布留2式期初期(3世紀後半~4世紀前半)にかけての区画溝とこれに伴う柱列が検出されている。区画溝は段丘の端面に掘削されたもので、幅・深さとともに約2mの規模を有する。溝の外側には土塁があり、約1.6mの間隔で柱が立てられていた。これらの施設は纏向遺跡内でも特殊な役割を持った施設(居館・倉庫群など)を一般地域から遮蔽するための施設と考えられている。

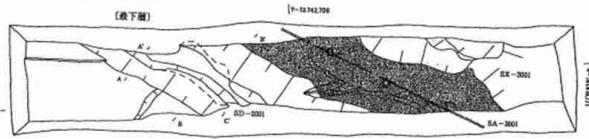


図8 尾崎花地区のV字溝と土塁・構列 (第80次 1/100)

日本における都市の初現-纏向遺跡

家ツラ地区の導水施設 (桜井市大字巻野内)

導水施設は中央に幅63cm、長さ190cmの大きな木製の槽を据え、北・南・東の三方から木樋を通して水を注ぎ、槽に集めた水は西側へとオーバーフローさせて、木樋から掘り溝へと排水する機能を持っている。調査は施設の一部で、全容は明らかではないが、浄水を集めた祭祀の場と考えられている。遺構は布留1式期(4世紀初め)には底絶しており、その設置は布留0式期新相(3世紀後半)ごろに遡る可能性が高いと考えられています。



巻向駅北西側 纏向遺跡 宮殿跡?? 出土地全景 2012. 7. 24



この写真の奥が東で 巻向・三輪の山並 中央左右に桜井線が走っている

日本における都市の初現 纏向遺跡 日本各地から持ち込まれた多数の外来土器

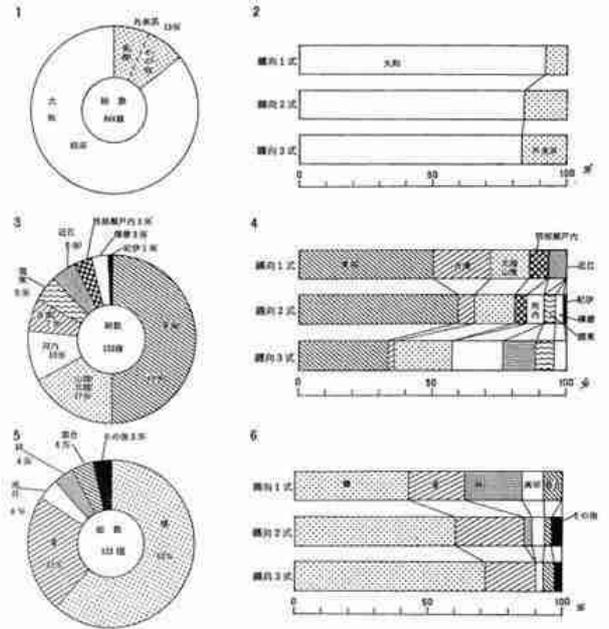
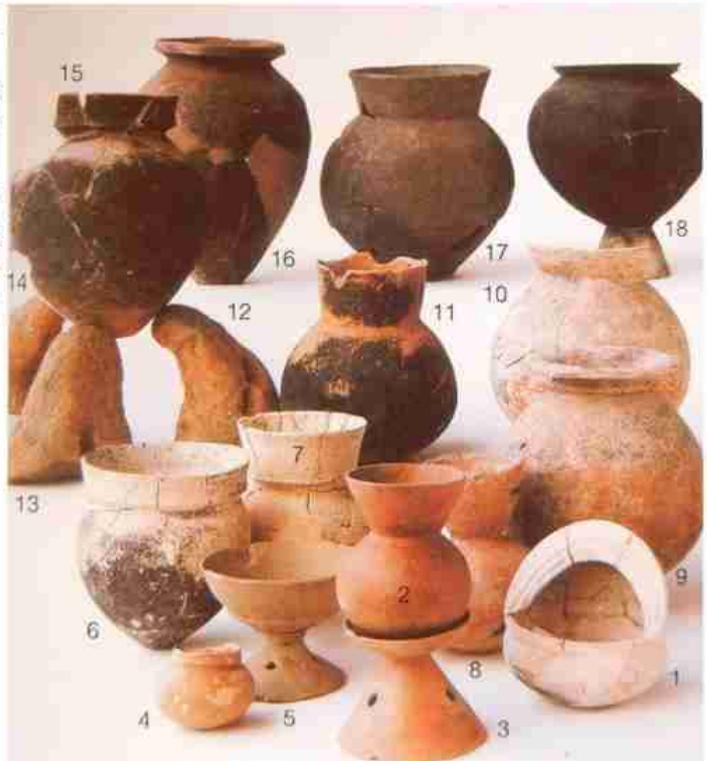


表1 纏向遺跡出土外来土器の比率



纏向遺跡の土器と各地から持ち込まれた土器
古墳時代前期 3世紀
1:手焙り形土器 高さ12.7センチ、最大径12.0センチ
2:小型丸底壺 3:小型器台 4:吉備系壺 5:高杯
6:北陸系壺 7:山陰系壺 8:直口壺 9:東海系壺
10:東海系壺 11:直口壺 12-14:支脚 15:山陰系壺
16:吉備系壺 17:直口壺 18:東海系壺

日本における都市の初現-纏向遺跡

鍛冶関連遺物 (桜井市大字巻野内・東田)

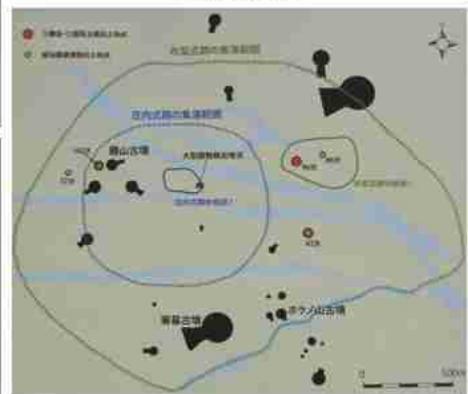
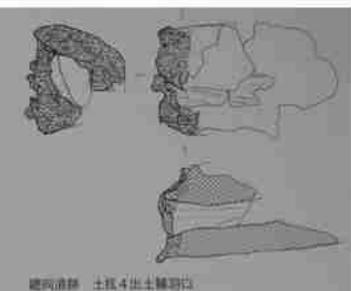
近畿でいち早い北九州型の高温本格的鍛冶 かまぼこ型羽口・高温鉄滓・土木具に特化した鉄器出土

近年の調査では鉄製品の加工も纏向遺跡の中で行なわれていたことが判明して遺物量は少ないが輪羽口や鉄滓・鍛造剥片・砥石などが出土している。これらの所属時期は布留0式期(3世紀後半)～布留1式期(4世紀前半)で、特に早い布留0式期のものは近畿でも段階の鍛冶関連資料であり、纏向遺跡の先進性が窺える。また、数多くの鉄器が集落から出土しているが、農耕具の「鋤」はほとんどなく、大半が土木具の「鋸」。数々の遺構・遺物とともに、この纏向遺跡の性格を考える重要な手がかりである。

遺跡名(時代)	鋸	鋤
大和・唐古・磯遺跡(弥生・前)	30%	70%
和泉・池上遺跡(弥生・前)	40	60
伊勢・新所遺跡(弥生・前)	27	73
近江・大中の磯遺跡(弥生・中)	12	88
和泉・池上遺跡(弥生・中)	35	65
大和・唐古・磯遺跡(弥生・後)	50	50
静岡・登呂遺跡(弥生・後)	25	75
福岡・辻田遺跡(古墳・前)	5	95
播磨・長船遺跡(古墳・前)	30 (60)	70 (40)
大和・纏向遺跡(古墳・前)	95	5
播磨・新所遺跡(古墳・前)	33 (38)	67 (62)
近江・滋賀屋遺跡(古墳・前-後)	50	50
千葉・菅生遺跡(古墳・後)	27 (39)	73 (61)

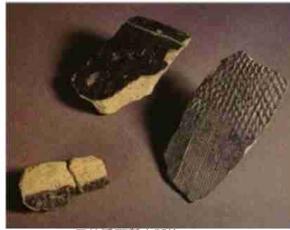
(注) 近畿の資料を参考として出土総数10点以上の遺跡に限る。
[]はナスタビ状遺物を除いた比率を示す。

表2 遺跡別土の鋸と鋤の比率





三韓系・三國系土器の器種は、壺・瓶・鉢・高坏・鉢などであり、素段系土器とは構成・形態及びその胎土が大きく異なる。製作技術では、三韓系・三國系土器には、静止系切りは認められず、格子タタキや鳥足文タタキなどの固有のものがある。また、三國系土器には、青灰色を呈する硬質（陶質）土器が加わる。器種構成や形態、製作技術に朝鮮半島の各地の地域色が認められ、壺や壺などの形態、タタキなどの製作技術の差異は著しい。

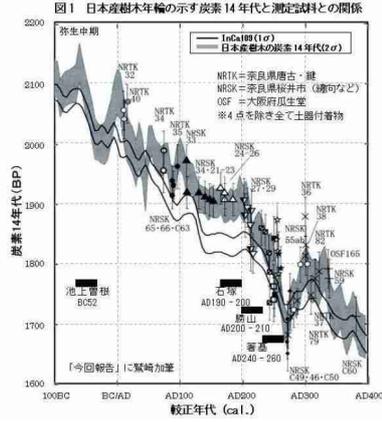


三韓系瓦質土器片

殊遺物の出土と重なることから、渡来人が数多くやってくる前の時代にいち早く渡来技術者がこの纏向にも来ていたと考えられる

卑弥呼の墓と騒がれた「箸墓」の年代が確定できない

合わせて 纏向古墳群の年代推定も



箸墓古墳や纏向古墳群の年代測定については、今もまだ確定していない。同じ年輪年代・加速器計測法によっても資料のサンプルや測定者の違いによる差など、誤差が出た。箸墓古墳の年代が3世紀半ばまで、遅れるとする説に大きな論争が生じている。箸墓より先に出現するとされる纏向古墳群の年代もその解釈が分かれることになる。周辺の事業との整合はまだまだこれから。現状、纏向を卑弥呼の邪馬台国とする説は伺えない。でも「日本での人工都市の初現 纏向」の価値は代わらない。

年代	100 BC	BC/AD	AD100	AD200	AD300	AD400
紀元前
西暦



ホケノ山から眺めた奈良盆地を見晴らすかす纏向 左端に箸墓 右側雨雲の下が生駒山



穴師 珠城山古墳群の丘から眺めた纏向南側の景色 右に三輪山 左奥に箸墓が見えている



纏向東田地区 纏向古墳群を眺める 田園の向こう 写真左端 勝山古墳・纏向小学校・矢塚古墳 右端 東田大塚古墳

【主な取りまとめ資料】 主にインターネットならびに纏向遺跡が記載されていた図録より 資料取りまとめました

1. 桜井市教育委員会 橋本輝彦氏 講演レジメ「日本における都市の初現 纏向遺跡」
2. 纏向古墳群・箸墓の年代測定についての資料 新井宏氏・鷲崎弘朋氏・歴博 資料&図
3. 村上恭通「古代国家成立の過程と鉄器生産」
4. 橿考研博物館「三国志の時代 2・3世紀の東アジア」展図録
5. 桜井市纏向学習センタ home page http://www.city.sakurai.nara.jp/maki_c/info/iseki.html

また、纏向遺跡のイメージを現す言葉として タイトルに橋本輝彦氏の使われた「日本における都市の初現 纏向遺跡」の言葉をつかわせていただきました。

2. 【現地写真資料】

邪馬台国の王都?? と騒がれた大型特殊建物群跡と纏向古墳群を見て歩く 2012.7.24. 桜井線の西側 3 世紀前半の纏向中枢地区大田地区と纏向古墳群のある東田地区



桜井線 巻向駅 2012.7.24.

巻向は何度も歩いたことがあるのですが、今日は特に桜井線の西側地区 卑弥呼の宮殿跡と騒がれた大型掘立柱建物出土地や箸墓の築造以前に築造されたといわれ、古墳時代の幕を開いた纏向古墳群 中でも鞆羽口など 3 世紀前半の鉄遺物が周堤周辺から出土した勝山古墳周辺を歩こうと 7 月 24 日のカンカン照りの午後 巻向駅に降り立つ。

どちらも遠くから眺めたことはあるのですが、歩いたことなし。

卑弥呼の宮殿跡と騒がれた大型掘立柱建物出土地は巻向の駅のすぐそばと聞くのですが、行ったことなし。

駅の無人改札をでて 宮殿跡が出土した場所へ行くのはこの道からですか????と高校生に聞いて、怪訝な顔をされて・・・。

それもそのはず、この宮殿跡が一番良く見える場所が巻向駅のホームの北端。出だしから失敗です。

また、場所は見えているのですが、出土地に行く道がわからず、結局ぐるっと一周。

1.1. 卑弥呼の宮殿と当初騒がれた大型掘立柱建物が出土 3 世紀前半 纏向遺跡の中核居館域 太田・辻地区



巻向駅北西側 纏向遺跡 宮殿跡?? 出土地全景 2012.7.24



辻地区の建物群 Buildings of Tsuji area

JR巻向駅北西側の纏向遺跡中心部で実施された第162次・166次調査において、方位をそろえて建てられた3世紀前半頃の4棟の掘立柱建物跡が見つかりました。右の写真はその位置に柱を復元して立てた様子で、柱穴の状況などから、上のような建物の姿が推定復元されています。



この写真の奥が東で 巻向・三輪の山並 中央左右に桜井線が走っている



2009年 大型掘立柱建物が東西に整然と並んで出土した現地 思った以上に狭い 巻向駅ホーム北端より



線路の西側は広々とした田園が広がり、巻向の山並を背に集落が線路際に広がっている



166次調査地「辻地区」 巻向駅のホーム北端が見える



巻向駅の南側 右側の山が三輪山

駅横の踏切を西に渡って 田園の中を北に回り込んで 纏向遺跡166次調査地「辻地区」へ
 入口がよく判らずうろろしましたが、県営住宅の前の道、線路際のところの住宅の間から出土地へ



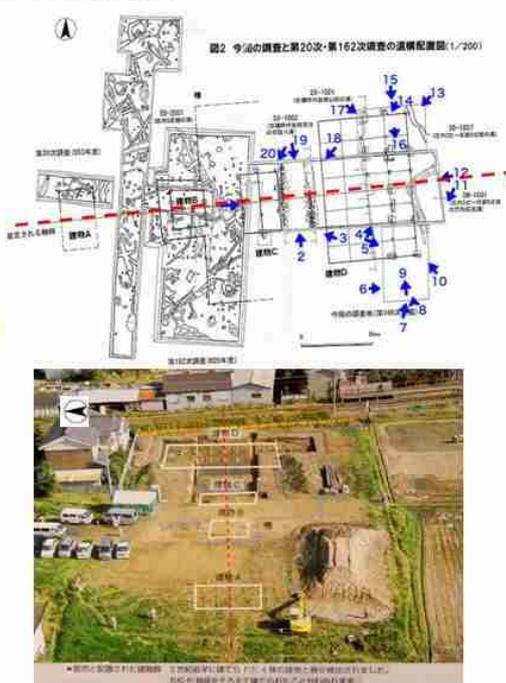
纏向遺跡第166調査地「辻地区」 邪馬台国の中心部と報道され宮殿跡???



北側 線路際から南北に大型の建物が建っていた3世紀前半纏向の中核部

線路際から見た景色 この草地にこんな風に東西に整然と並んで大型建物が建っていたようですが、この建物が何なのかはまだ、これから。また 線路を渡って北にもさらに広がっているようですが、北側は住宅が建ち並ぶ巻向の集落の中 おいそれと発掘が出来ないようだ。

宮殿跡が出土した?? 纏向遺跡第166次調査現地写真



纏向遺跡第166次調査 現場写真(2009/11/14,15) <http://www.gensetsu.com/091114makimuku/photo1.htm> より 整理
 纏向遺跡第166次調査 現地説明会資料(桜井市 2009/11/14,15) <http://www.city.sakurai.nara.jp/4211114.pdf>

1.2 3世紀戦半の巻向 中心部から西端東田地域へ 纏向古墳群



桜井線の東側 天理から桜井を結ぶ旧街道「上ツ道」に広がる巻向の集落



巻向駅東側 南北の旧街道「上ツ道」 巻向川が流れ出る山麓兵主神社の鳥居

大型建物出土地横の踏切を渡って、巻向の集落に入ると穴師兵主神社の石の鳥居前十字路にでる。

鳥居前 巻向集落の家並みがつづくこの東西の街道は天理と三輪・桜井からへと続く古道「上ツ道」で南へ行けば、箸墓古墳のすぐ横にでる。また鳥居横を東に傾斜地を登ってゆけば、穴師 兵主神社へと続く道。巻向山と三輪山の間から流れ出る巻向川が流れ出てくる谷筋 扇状地の根元へ至る道。また、西にこの道を降りてゆけば、纏向小学校と纏向古墳群の纏向石塚山・勝山・矢塚3つの古墳の横 東田地区に出る道。

街中で 景色が見えないが、この周辺が、最初に纏向遺跡が出現した中心地。街道沿いに南北につながる集落を一步外れると東の巻向・三輪山の間から流れ出る巻向川が作ったなだらかな傾斜の扇状地が西の奈良盆地の中央へと広がる田園地帯がどこまでも続いている。

巻向駅の南側を大型掘立柱群の出土地を眺めながら西へ集落を抜けると 国道にぶち当たり、一面田園地帯で視界が開け、国道を渡った右手に纏向小学校が見え、その手前国道に沿った広い草地の中に小さな丘みえた。これが纏向石塚山古墳。



纏向遺跡周辺地図と今回歩いた纏向中枢部 walk Map



巻向駅の西南側から 大型掘立柱群の出土地を眺める



3世紀 箸墓より前に築造された出現期の前方後円墳古墳 どうみても私たちがよく目にする前方後円墳には見えない



纏向古墳群 石塚古墳 国道166号線脇側の前方部側から墳丘を眺める

前方部が後円部に比べて小さい典型的な初期の前方後円墳
 前方部と後円部が重なってしっかりと形が見えず、円墳の形が崩れているように見える

国道側 正面から眺めた纏向石塚山古墳 手前国道側が前方部 後が後円部

後円直径:前方の長さ=2:1 前方部が著しく低い典型的な纏向型といわれる古墳で出現期前方後円墳の代表的な古墳である



古墳横 国道南側の景色



石塚山古墳の北角 西の小学校の方に入ると矢塚古墳と勝山古墳がある



纏向石塚山古墳から眺める東側 巻向・三輪山を背後に巻向の家並み 正面家並みの後が巻向駅



北側角周辺から眺める纏向石塚山古墳 やつと古墳らしい後円の墳丘がながめられました



石塚山古墳の横を西に入ると纏向小学校の北側の校門（通用門） 登り坂の道の西正面に柵のある堤が見える

学校の北側に小高い丘と堤が見えているのが勝山古墳だった。前方の視界が開けないので、よく判らなかつたが、草ぼうぼうの土手を上がると勝山古墳の周堤で、池の真ん中にこんもりとした勝山古墳があった。

この勝山古墳もやっぱり前方後円墳の姿が良く見えなかつた。もともと 下の写真は 後円の正面から見ているので形はよく判らないが、8月再度訪れ、北側から眺めた姿では、前方部が東へ伸びているのがわかつた。でもやっぱり前方部は低くブッシュの中で詳しくは見えなかつた。

この勝山古墳の西の周堤の整備作業の調査で 周辺から 3 世紀当時の先端高温鍛冶技術を有する北部九州の技術につながるとみられるカマボコ型鞆羽口や鉄滓・鉄製品などの鉄遺物が出たという。



纏向 勝山古墳 箸墓古墳よりも古いといわれ 周辺には築造時の濠の痕跡を残す「勝山池」が存在

勝山古墳(墳丘墓)
Katsuyama burial mound

3世紀代に築造されたと考えられる大型墳墓で、前方後円形の墳丘は全長約115mを測ります。纏向石塚古墳と同様に、定型化した前方後円墳が出現する以前に築造された可能性が考えられています。埋葬施設の内容は不明ですが、墳丘の周堤をめぐる周濠状の遺構からは土器や木製品が多数出土しており、なかには建築部材やじ字形木製品など特異なものも含まれていました。これらの遺物は、古墳出現期における墳墓祭祀を知る上で貴重な資料となっています。

桜井市教育委員会

纏向勝山古墳

纏向勝山古墳は、東面する全長約170m、後円部の高さ約7mの古墳時代前期の前方後円墳で、周囲にはかつての濠の痕跡を残すように、逆台形の池がある。詳しい調査が行われていないため、築造の時期や主体部の内容など、詳細は不明だが、墳丘の築造企画は纏向石塚・纏向矢塚・東田大塚・ホケノ山などの古墳、と同じ築造企画を持つ纏向型前方後円墳の一つと考えられ、箸墓古墳に先行する古墳になる可能性も指摘されている。

桜井市教育委員会

歴史街道



北側から眺めた勝山古墳 何とはなしに前方部の形が見えている



勝山遺跡 西側の周堤 奥左 纏向小学校 右の森が矢塚古墳
この周堤周辺や西側田圃より数多くの鉄鍛冶遺物が出土し、この周辺に纏向の鍛冶工房があったと見られる

3世紀前半の韃羽口や鉄滓など鉄遺物が出土したという勝山古墳の西の周堤 学校の右手に矢塚古墳が見える



土手の西側は広大に広がる奈良盆地の田園がひろがっていました



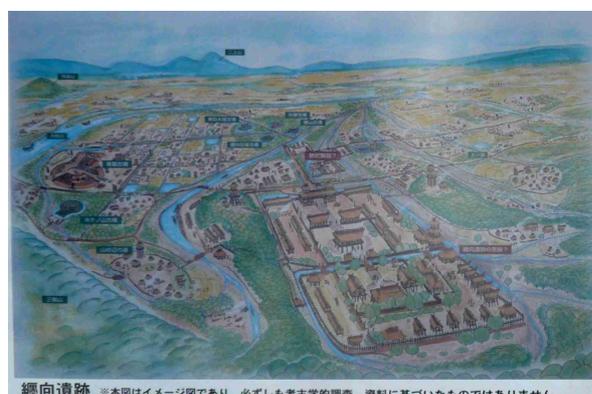
巻向駅の西側は箸墓周辺には行ったことがありますが、よく知らず、今回始めてみた纏向古墳群
 こんなに近くに しかも 平面の田園の中にぼこぼこ古墳が浮かんでいるのにはビックリ。
 私のイメージとはちょっと違った築造場所 でもここが纏向のはずれとするとそれもうなづける。
 それにしても 鉄が出土したといっても 本当になにもないなあ・・・と

いまで、纏向遺跡を卑弥呼の邪馬台国 そして 大和王権につながってゆく大和の根拠地と漠然としたイメージで捉えていま
 した。今回橋本輝彦氏の「日本における都市の発現」の視点や纏向遺跡の具体的な都市機能遺構などにふれ、いまさらなが
 ら 纏向の不思議 面白さに触れることが出来ました。
 謎に包まれた纏向の鉄ですが、何か大きな役割を演じたに違いない。



発想を変えると このあたりは初瀬川(大和川)から纏向へ入る入口
 3世紀の昔に大規模な大溝が掘られるなど土地改良が行われている。
 纏向では今までの大和にはない他の遺跡とは異なる偏った特徴ある
 遺物・遺構が出土するのも、この土木工事の大きさに起因し、それが
 ここで営まれた人工都市纏向につながっているのだろうか……。
 それにしても 人の営み・姿が見えない纏向 不思議である。

ついでながら 私の頭に強く印象付けられていた纏向の景観図
 まだ 真偽はまだこれから・・・でも こんな素晴らしい都市
 景観が古墳時代前期にあったとしたら すごい。



久し振りに 古代製鉄関連地名であり、鍛冶集団が奉るといわれる兵
 主神社がある穴師へも足を伸ばしたかったのですが、今日は 巻向へ
 やってきたのが、遅かったのもう東の穴師の方へゆく
 時間がない。

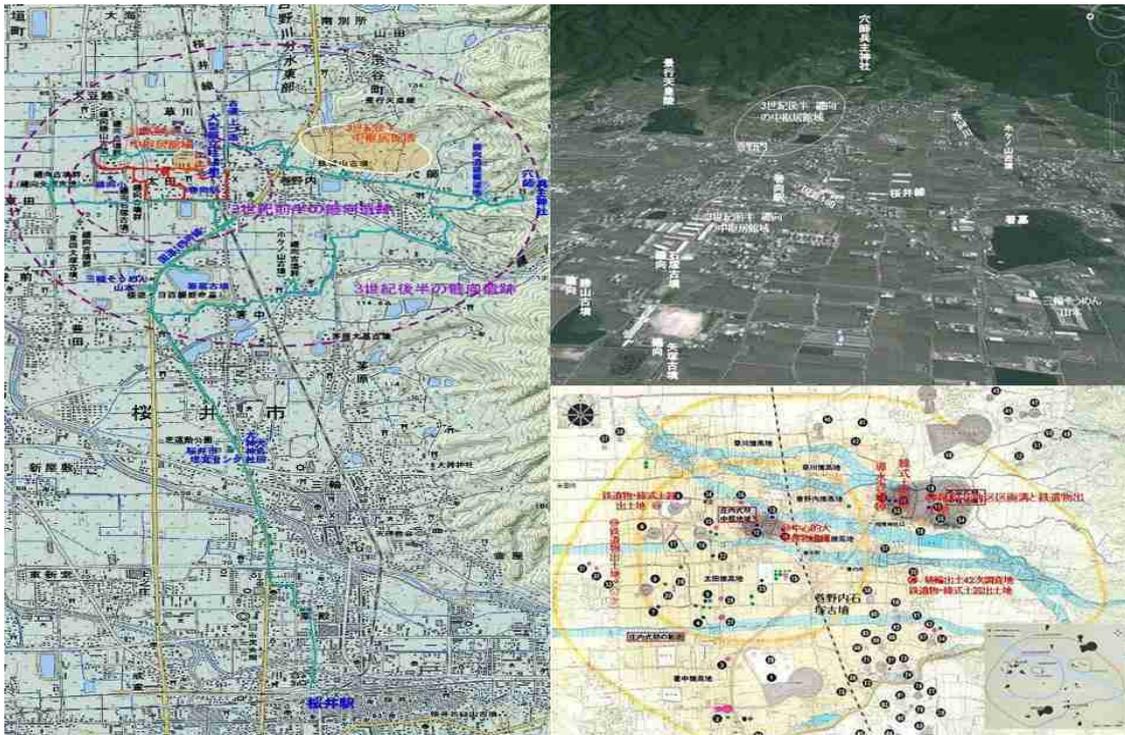
ぶらぶら 古墳の周辺を歩きつつ この大和で初の先端鍛冶技術
 を持った纏向の不思議に色々思いをめぐらしながら巻向駅へ戻りました。

3. 【現地写真資料】

鉄をキーワードに纏向遺跡の謎を探る 纏向再訪 walk

2012.8.23.

纏向遺跡全体を眺め 人工都市の意味と鉄の役割実感



日本の都市の初現「纏向」をイメージしながら再度纏向を歩きました。

大和王権の誕生 そして 古墳時代の出現をもたらした「纏向」 そのキーワードのひとつは「鉄」

畿内でいち早く 北部九州の先進鉄技術が入った「纏向」ですが、鉄の役割も その出土遺物からはもうひとつよく見えない。また、大規模な大溝 そして 巨大な前方後円墳を築造した纏向 鉄なくてはかながえられぬ人工都市の出現でも 纏向に人の影が見えない これは何を語っているのでしょうか???

前回 歩いた7月24日には 纏向の全体像をじっくり眺められなかったので、今回は纏向 全体をぐるっと歩く。

また、桜井市の埋文センターの纏向遺跡の展示の語る纏向も知りたい。

そんな 纏向の謎と鉄を頭に ゆっくり 一日 再度 纏向を歩きました

かんかん照りの夏の日に 雷鳴轟く激しい夕立のおまけも付けて



本資料は 8月23日 桜井駅を起点に 国道169号線三輪の大鳥居前にある桜井市の埋蔵文化センターに立ち寄り、纏向の展示を見学。

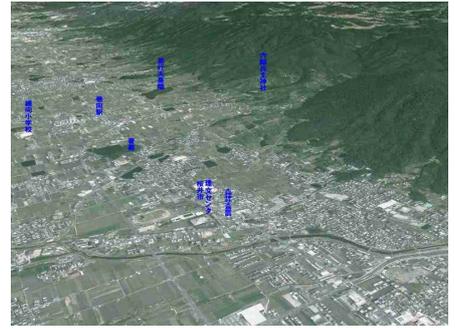
色々纏向について教えてもらったあと、国道169号線沿いを箸墓にでて、そこからぐるりと纏向遺跡の中をぶらぶら 纏向の今をデジカメに納めて歩きました。

ちょっと話題先行気味の纏向遺跡まだ発掘調査は10%にも満たない。何が出てくるか、まだこれからで、いろんなイメージをふくらませるのは、専門家も素人もみなおなじ。この謎に包まれた都市に、私も「纏向の鉄」を絡ませながら、古代のロマンをふくらませています。

そんな纏向遺跡の今を歩いた写真を整理しました。

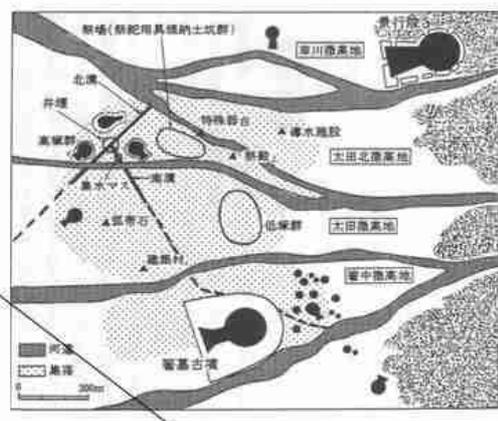
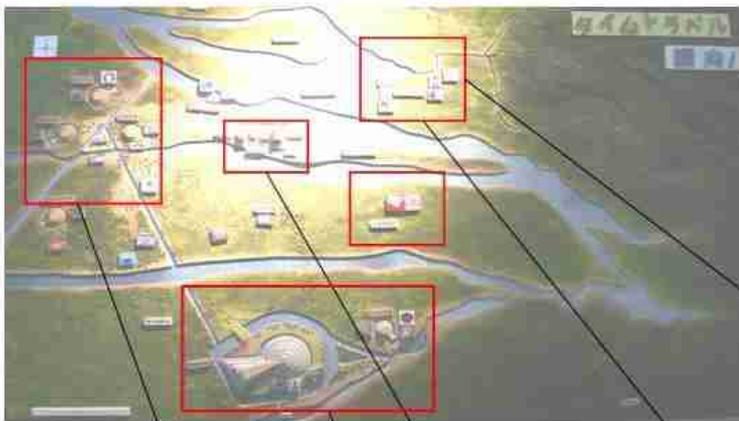


3.1. 桜井市埋文センターで 纏向の展示を見る



桜井市埋蔵文化財センター
纏向遺跡の展示より

【纏向遺跡から出土した遺物の全体展示】



纏向古墳群と大溝



3世紀前半、庄内式期の居館城？



3世紀後半布留式期の居館城？



韓式土器・植輪群出土地



箸墓古墳とホケノヤマ古墳

日本における都市の初現 纏向遺跡

桜井市埋蔵文化財センター展示より



近地区検出の建物群
展示模型(1/100)





太田の微高地 3世紀前半の居館域から出土したさまざまな祭りの木工具



纏向遺跡で出土した搬入土器

纏向遺跡の鉄生産

纏向遺跡では鉄素材を外部から仕入れた後に製品を加工する工程の小鍛冶が行われていました。主な出土遺物には鞆羽口や鉄滓・鍛造剥片・砥石などがあり、その分布状況からは小規模な工房が遺跡内に散らばって生産にあっていたと考えられます。

なかでも、鞆羽口は他地域との技術交流を示す資料として注目されます。出土した羽口には断面がカマボコ形をしているものが含まれており、これは纏向遺跡の鍛冶技術に北部九州系の技術が導入された結果と考えられています。



桜井市埋蔵文化財センター展示より



102次調査出土カマボコ型羽口
榎考研「三国志の時代」図録より

一番気になっていた纏向遺跡から出土した鉄遺物は80次調査で巻野内から出土した3世紀後半の鞆羽口や鉄滓そして鉄器など。纏向では鉄器のほとんどが土木工具と考えられる鋤が多数出土したと資料にあったのですが、イメージ的にどんなものが出土しているのか気になっていましたが、大きな厚さのある立派な「鋤」。こんな厚い大きな鉄が纏向に入っていたことにビックリ。一番の収穫でした。



纏向遺跡出土鉄器



鞆の羽口



砥石

纏向遺跡 80次調査で巻野内 尾花崎地区から出土した鉄器・鍛冶鉄滓・鞆羽口・砥石 3世紀後半のようだ



勝山古墳の南側の纏向小学校横の道との間の草地の土坑や溝から出土した3～4世紀頃の土器類 172次調査

展示を見たあと、纏向遺跡について色々教えてもらいました。

1. 纏向遺跡では 人の暮らし・姿が見えない謎

やっぱり竪穴住居群を中心とする集落が今も見つかっていない

2. 展示されていた鞆羽口がカマボコ型にみえず、纏向ができた初期のものか

展示されていた鞆羽口は巻野内でしゅつどした3世紀後半のもの。3世紀前半と言われる勝山古墳横から出土したカマボコ型
のものは榎考研が調査。

纏向での鉄遺物は他にもいろんな場所から出土している。

巻向駅北の県営住宅のところ また、169号線箸中の三輪そうめん山本の本社工場などからも出土

3. 鍛冶工房があったと言われるが その主たる鍛冶製品が見えてこない。出土している「鋤」だろうか???

鍛冶工房跡そのものは見つかっておらず、どんな鉄器をつくっていたかは よくわからない

◎ 纏向の隣 4世紀の物部氏の布留の鍛冶工房では祭祀に使う道具の加工工具が主であったように私には見えた。
その他 山陰・丹後・北陸では 勾玉などの珠加工の工具 四国阿波の矢野遺跡では朱の工具などそれぞれ目的
とするものの加工が弥生の終わりから古墳時代前期の鍛冶工房の主機能（実用鉄器）と見えたのですが、纏向で
は北部九州の先端鍛冶技術がいちはやく入り、また大型鉄器の部類の「鋤」が出土する。

「半島の鉄素材の確保」がこの時代の鍵だと言われる古墳時代前期 この先端都市纏向でどんな鍛冶加工が行
われていたのか興味深々である。

4. 製鉄関連地名の「穴師」 鍛冶集団が祀る古い兵主神社もある。 本当に鉄が出たのだろうか

正確な場所は知らないが、この巻向の谷筋の山の中に鉄穴があると聞く

5. 3世紀に忽然と現れ、また、4世紀に忽然と消えた纏向

卑弥呼の宮殿説 出土した大型建物の性格も その年代を含め、まだこれから。

纏向の発掘はまた 10%に満たない。 3世紀後半の中枢居館域と言われる巻野内の発掘調査もまだ これから

マスコミ報道などのイメージ先行の纏向 確かなところはまだ これから わからないのは 研究者も同じようだ。

纏向についての断片的なイメージを抱きながらの walk のスタートでしたが、櫻井の埋蔵文化センターで話が聞けたので、揺
れ動いていたイメージがはっきり。

わかっているのは 纏向が巨大な土木工事が行われた都市建設され、日本全国から多数の人が集まってきた痕跡がある。

そして、この纏向によって ヤマト王権を中心
とした統一国家づくり 古墳時代の幕開けとな
ったことだけだ。

この纏向の当主は誰なのか また、この都市を
建設した人たちはどこに住んでいたのだろうか
纏向は まだ だれもよくわかっていないのだ。

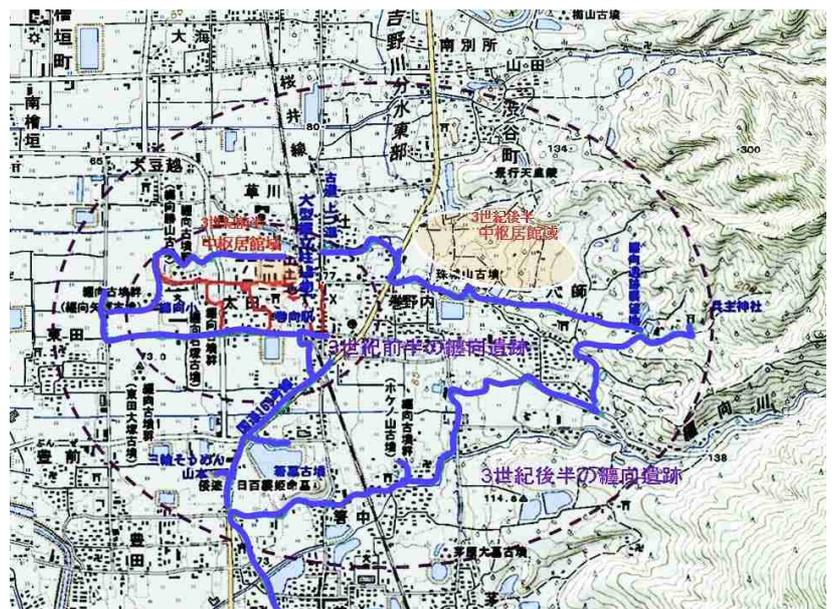
今回は まず 前回は見られなかった纏向の
遺跡の全体像を見よう。 一気に遺跡の四方
の端まで行って また、全体が見渡せる場所
に立ちたい。そして、やっぱり 鉄が出た
地点にも行って見ようと

まず 国道169号線を北へ

纏向の南西の端 箸墓のある箸中へ行って

あとは思いつくまま 気の向くまま纏向 walk と

埋蔵文化財センターで聞いた話を思い浮かべながら歩き出す。



2012. 8. 23. 纏向再訪 walking map

3.2. 箸墓周辺 箸墓と鉄遺物が出たと教えてもらった三輪そうめん山本本社工場

埋蔵文化財センターを出て、きたへ少し歩くと、いきなり左手の池の北側 民家の上に頭を出している大きな古墳が見える。地図をみもは巻向駅から 上ツ道を歩いて、北東側からしか行ったことがないのでびっくりでした。

この池の北側国道を横切って巻向川が東から流れ下ってくる。この川を渡るともう180度 見えるこの中が巻向遺跡である。橋の東側には 流れ下ってくる巻向川の奥に巻向・三輪野山が見えている。あの山のところまでがすべて纏向遺跡の範囲である。また、道の反対側の西には 広々とした奈良盆地の田園地帯がひろがり、その向こうに金剛・葛城そして二上の連山がながめられる。雲が浮く青空に赤トンボが舞い、秋近しを思わせるが、暑い日差しが照りつけてくる。



国道169号線 箸中南周辺 いきなり池の北側に箸墓

池の北側を流れ下る巻向川

巨大な箸墓古墳 そして 東から巻向川が流れ下る箸中南周辺 ここから北は180度纏向遺跡の範囲である



国道169 箸中南周辺 流れ下る巻向川岸より 巻向の山並を眺める 左より 箸墓遺跡 巻向・穴師の集落 三輪山

巻向川の橋を渡るとすぐに箸中南の十字路で、道の右手には田園の中に箸墓の墳丘が見え、その後ろには三輪山がそびえている。そして、箸墓の丘の裾を箸中集落への道が見えている。私の知る箸墓の景色の中に入った。

国道の道脇には「箸中」のバス停があり、道の向こう 西側には奈良盆地の田園がひろがっている。



箸墓が田園の向こうに見える国道169号箸中南交差点



赤トンボが飛び初めて 秋近し 箸墓の西側に広がる田園 金剛・葛城の山並 2012.8.23



赤トンボが飛び初めて 秋近し 箸墓の西側に広がる田園と全剛・葛城の山並 2012.8.23.

十字路の向こう右側 広い敷地に三輪そうめん山本の看板が見える。道の東奥に入っているので、全体の形は見え、全体がもう視野いっぱいに入っていて 森としか映らない。一方ここが、埋蔵文化センターで教えていただいた鉄遺物が出た纏向遺跡の一部で、道路側には食事ができる茶屋がついた直売場 その奥が向上になっていた。ちょうど箸墓の正面である。



三輪そうめん山本の入口



道の反対側にも街並み



三輪そうめん山本の中から箸墓を眺める



三輪そうめんの直売場とレストラン この中に ここから出土した遺物の展示コーナーがありました



三輪そうめん山本の本社工場の敷地は纏向遺跡の一部 この工場建設の調査で 数多くの遺物・遺構が出土した





三輪そうめん山本 本社工場から眺めた箸墓 背後は三輪山 ここは纏向遺跡の南西端



三輪そうめん山本本社工場にある三輪茶屋
この建物の中に この地の出土遺物の展示コーナーがありました





三輪そうめん本社工場敷地から出土した蕨羽口 古墳時代前期

三輪そうめんの直売場とレストランの中に この敷地から出土した遺物の展示コーナーがありました

そうめんの太さにはいろいろあるが、三輪そうめんは超極細で有名。

ここで それを食べられると聞いて 久しぶりに冷やしそうめんの昼食をして walk を再開。 箸墓へ向かう。

ここからすぐ北が国道 196 号箸中の交差点で、国道はここで大きく右の巻向の山裾へカーブしてゆく。

正面の田園地帯には 幾つか古墳群が浮いて見えていて、いよいよ 巻向遺跡の核心部である。



三輪そうめん山本社工場から西側 二上山遠望



箸墓の前 国道 169 号 南側



箸墓の前 国道 169 号 南側



カーブする国道の正面 箸墓古墳北西角の周堤から眺めた箸中の交差点 北西側



交差点の正面には先日見た巻向小学校 左奥に生駒山 巻向古墳群が頭を出している

ここを西（写真右手）に入ると田園地帯を纏向石塚山古墳の方へゆく。西を眺めているイメージでしたが、見えている生駒山の方向からすると 国道がここでカーブしているの、北東側を眺めている位置にいる。これで 見えていた建物群が東田であると頭と一致する。道路のイメージで方向感覚がおかしい。地図と磁石がいる。

国道はここで大きく北東へカーブして、東の巻向の山並みの方へ向かい、纏向の跨線橋を越えて 山裾を北へ走る。南側には 池の向こうに前方後円墳 箸墓が堂々とした姿で 影を池に映している。

でも この箸墓は纏向ができた3世紀前半にはまだない。この位置で箸墓を眺めるのははじめてである。

西へゆけば そのまま纏向古墳群のある東田地区なのですが、見えている国道の跨線橋から巻向駅周辺が見たくて、東の山側へ向かう。



北側から南方向に眺めた箸墓古墳



南側からの箸墓

北側カラの箸墓

箸墓古墳 前方後円墳の対称性のあるきっちりした姿が眺められました

3.3. 巻向駅周辺 纏向遺跡 3世紀前半の居館中枢部 周辺



巻向駅南の跨線橋から 歩いてきた国道箸中方面を眺める 後ろに金剛・葛城・二上山の連山が見えている



北側：左端に二上山が見え、纏向古墳群 線路際左が3世紀前半の纏向の中枢が見える



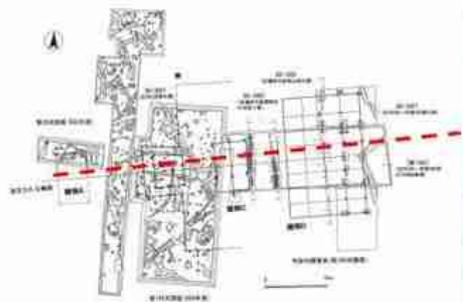
南側：左から 巻向山・三輪山の谷から右端にホケノ山古墳・箸墓古墳が見える

巻向駅のすぐ南側 国道の陸橋より 巻向の町並みを眺める

跨線橋を降りて、線路沿いを巻向駅周辺へ行って、そこから西 纏向古墳群のある東田地区の一番西の橋まで行ってそれから、反転して 一番東 穴師の里まで、巻向野山の山麓へ向かおうと。



巻向駅のすぐ東を南北に結ぶ街道 上ツ道



3世紀前半 纏向の中樞の居館域を南側から眺める

3世紀前半纏向の中樞、居館域を眺めながら西へ集落を拓す。田園の中、纏向古墳群が並ぶ東田地区へ

3. 4. 纏向古墳群の古墳が点在する遺跡の南端 東田地区へ

3世紀前半の北部九州の先進技術移入を思わせるカマボコ型韃羽口が出土した勝山古墳の堤周辺を確かめにゆく



国道を横切りまっすぐ西へ 北側には纏向小学校の右横に纏向石塚古墳 纏向東田で

国道を横切りまっすぐ西へ 北側には纏向小学校の右横に纏向石塚古墳校舎の後ろには勝山古墳の頭 校舎の左には矢塚古墳の森もみえる。いずれも 箸墓よりも先に建設された古墳時代前期の纏向古墳群の古墳。道を挟んで 反対側 南東側田園の向こうに箸墓が見え、北側には今掘りてきた巻向の集落が三輪・巻向の山々を背に見えている。

纏向 東田で



北側 巻向・三輪の山々を背に広がる巻向の集落



南東側には 国道の向こうに箸墓が見える



纏向小学校の東 纏向古墳群を代表する古墳のひとつ 纏向石塚古墳 纏向東田北北方向



中央を南北に横切る国道169号線の向こうに箸墓が見える 纏向東田より南東方向



まっすぐ西へ伸びる道奥には広々とした奈良盆地が見渡せる追跡西端 纏向東田の端。左端には東田大塚古墳 右側には矢塚古墳が見えている。



田園の中のT字路で東側を振り向くと 巻向・三輪山を背に 広大な纏向全体がみえる。

田園地帯をまっすぐ西へ伸びる道奥遠く左には葛城・二上山 右端には生駒の山並 広々とした奈良盆地が見渡せる纏向追跡の西端の纏向東田の端。また田園の右端には東田大塚古墳 右側には矢塚古墳が見えている。この向側に見える古墳を通り、さらに西へ歩いて 田園の中のT字路で東側を振り向くと 巻向・三輪山を背に 広大な纏向全体がみえる。二つの古墳が まるで 纏向への入口の門のように建ち、右端奥には墓室も。そして、正面 巻向・三輪の山間から流れ出た巻向川が幾筋もの流路となって纏向の地を流れ下り、この東田のさらに西を南東から北西に流れくだる初瀬川(大和川)に注いでいたという。

纏向の人達はこの水運の地に大溝を掘り、水路をめぐらし、新しい人工都市を築いた。出土する鉄器の大半が土木用の鍬だという。でも、この追跡には人々の影がいまだに見えてこないと聞く。これだけの人工都市に人の影が見えないのは、やっぱりこの纏向全体が王国の宮殿 特別な地だったのか……追跡地図を開いて この纏向の謎に思い巡らす。まだまだ 纏向の発掘は10%にも満たない。結論はまだまだ先になるだろう。



纏向東地区の西側 田園の向こう 左手金剛・葛城・二上山 右手生駒連山



纏向東田地区 纏向古墳群を眺める 田園の向こう 写真左端 勝山古墳・纏向小学校・矢塚古墳 右端 東田大塚古墳



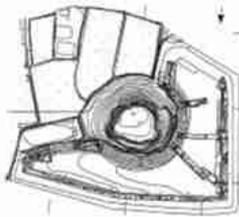
勝山古墳西の周堤の北端から南側を眺める



北側の周堤から眺めた勝山古墳全景



勝山古墳北側周堤の西端から東の集落を眺める



纏向古墳群の古墳形状は纏向型と呼ばれる後円部が前方部に比べて大きくかつ高い特徴を有し、ざっと概観をただけではその形状が前方後円墳で在るとは見えない。



国道の東側大田の集落に入って
北東側から 纏向石塚古墳・纏向小学校・勝山遺跡を眺める

勝山古墳の周堤を一周して北側に出るとこれから向かう東側の山裾に広がる巻野内地区が一望される
3世紀後半 纏向遺跡の中樞居館域が東側 巻向・三輪山の山裾に移った地域である。



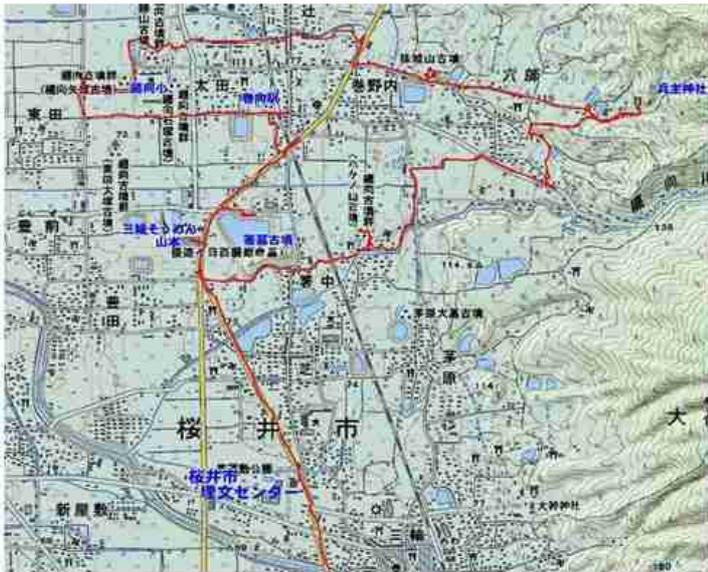
東側の山裾に広がる巻野内地区遠望 また 勝山古墳の前方部が池の向こうに見え、その低さがよく分かる



勝山古墳の周堤を一周して、
国道の東側へ

纏向石塚山古墳と勝山古墳に挟まれて 纏向小学校の横に見える

3.5. 巻向の集落を抜けて、3世紀後半 纏向の中心地となった巻野内地区から一番東の端 穴師へ



桜井線の踏切を越えて東へ 辻の集落

上つ道をそのまま横切って 水路沿いを東の山裾へ

纏向古墳群の東田地区からまっすぐ東へ 3世紀後半の中心地となった巻野内地区から遺跡東端穴師兵主神社へ



水路沿いに辻の集落を抜けると田園地帯の向こう山裾に景行天皇陵が見えてくる



南北に国道169が走る巻野内 この道路の東側が3世紀後半の纏向中枢地域



国道から眺める3世紀後半纏向の中枢域居館となった巻野内

正面の巻向・三輪山の間を流れ下る巻向川の扇状地上部で幾つも丘が並ぶ傾斜地で一番奥が鉄と関係深い穴師 国道の近くからは導水施設遺構 そして前面に広がる居館域からは鍛冶・木工の工房があったと推定される遺物が出土

国道を少し南に戻って 穴師・兵主神社などの案内標識のある辻北の信号から、東の山裾へ集落の中 ならかな坂道を登ってゆく。 この道が古くから飼われてきた集落の道のように、田園を抜けるとほどなく穴師の集落の入口で 道の北側に珠城山古墳群の丘が見え、道はこの枝尾根に沿って山腹を東へ続き、この古墳の東側に穴師の集落が広がっていました。



南側から景行天皇陵そして纏向3世紀後半の居館域が眠る印円地帯を眺める



辻北の信号から東 巻向の山裾へならかな坂を登る この道の一番奥が穴師



左手 田園の奥に景行天皇陵

正面奥 群珠城山古墳群と三輪山

右手奥 巻野内の集落

穴師の集落の入口の坂道

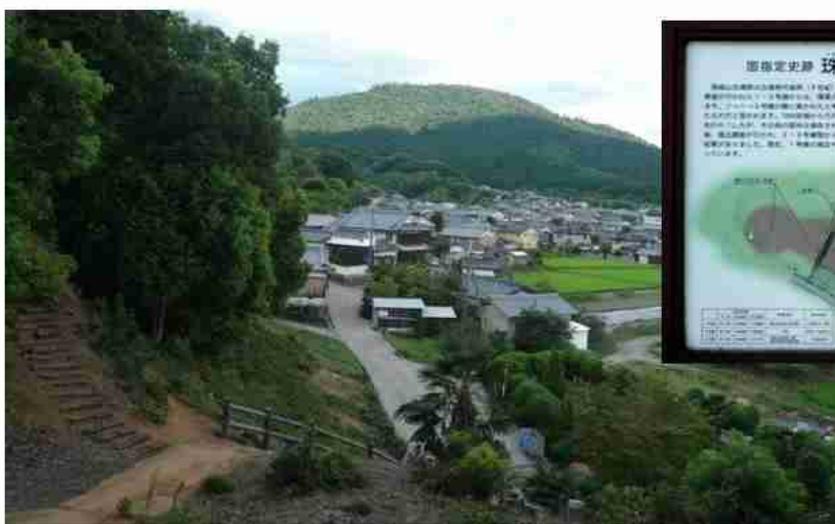
左手田園の奥に景行天皇陵 正面家の後に古墳時代後期6世紀の古墳群珠城山古墳群と三輪山 右手には田園の向こうに箸中の集落が見える 3世紀後半の纏向の中樞居館域にいる





穴師 珠城山古墳群横の坂道 穴師の枝尾根山腹の坂道で

この古墳群は枝尾根の頂上部 尾根筋に沿って6世紀の前方後円墳が並んでいて この尾根の向こう側 尾崎花地区を含め、纏向全体が眺められる。夕焼けが綺麗な場所で何度か登ったことがある。



珠城山古墳の登り道から眺める穴師の集落



珠城山古墳群の丘の上、西への尾根道、2号墳のより口



珠城山古墳群の丘の上、2号墳と1号墳の鞍部



珠城山古墳群の丘の上、西への尾根道、2号墳から1号墳への道

尾根筋に沿って 頂上部 3つの古墳を結ぶ道



古墳群の丘の西先端部から眺めた西側の景色
 纏向の中核部が田園・集落の中に眠っている



古墳の北側 景行天皇陵の前に巻野内尾崎花地区

3世紀後半の纏向居館中核域である



古墳の南側 東に広がる穴師地区の集落の端が見えている

珠城山古墳から眺めた巻向遺跡域の展望



穴師 珠城山古墳群の丘から眺める 巻野内 尾崎花地区
3世紀後半の中枢居館域 巻野内 尾崎花地区



穴師 珠城山古墳群の丘から眺める 南側の扇状地

集落を更に奥へきつくなつた坂道を抜けてゆくと 両側に果樹園が広がる丘の上。
 纏向遺跡が高い場所から見晴らせる展望地から兵主神社へと丘の上の一本道 振り返ると眼下に纏向から奈良盆地が見え隠れしている。程なく 纏向遺跡の展望所 。
 かつて 日本初の都市出現の纏向イメージ図に眼前に広がる展望を見ながら ビクリした場所です。



穴師の集落から更に東の山の奥穴師 兵主神社へと続く道



古代の都市のようす
 —— 初期ヤマト王権の発祥の地 ——

纏向遺跡

纏向遺跡は、初期ヤマト王権発祥の地として、あるいは奈良の都（710年）以前、近畿の政治・文化の中心地として、重要な役割を果たしたと見られる。纏向遺跡は、その中心地としての役割を果たしたと見られる。纏向遺跡は、その中心地としての役割を果たしたと見られる。纏向遺跡は、その中心地としての役割を果たしたと見られる。

纏向遺跡の歴史

纏向遺跡は、その中心地としての役割を果たしたと見られる。纏向遺跡は、その中心地としての役割を果たしたと見られる。纏向遺跡は、その中心地としての役割を果たしたと見られる。



穴師の扇状地の奥 纏向の展望地より西側を眺望

展望地のすぐ上 兵主神社の鳥居前野道の北側は広い畑が広がる谷筋でここからは杉らしい纏向が展望できました。



穴師 兵主神社鳥居前の田園地から眺める纏向



穴師 兵主神社の石の鳥居前 鳥居をくぐると境内の森の中へと続く そのすぐ右脇には相撲神社がある



「穴師」とは、第11代垂仁天皇が技術を持つ部族に与えた101個の品部の1つ、穴を掘り、採掘して鉄を得る部族である大穴磯部(おおあなしへ)をさすと考えられている。
この地に居住していた武器などを作る鍛冶の技術に熟達した「穴師」たちが、その守護神として祀ったのが穴師坐兵主神社と考えられます。

穴師 兵主神社 社殿



穴師の里へ下る道から眺めた纏向 3世紀後半の中枢居館域 巻野内尾崎花地区 遠望

毎度 登ってくるたびに 素晴らしい景観に見とれる素晴らしい景色

生駒山に雷雲がかかり、雨がやってきそう。

ここから 南西側の箸中のホケノ山の方へトラバースして 箸中から桜井へ出ようと 纏向の景色を眺めながら下る。

ここにも 纏向を舞う赤とんぼ まもなく秋を感じる景色です

一方 纏向からこちらへ 雷雲がもうスピード 雨の前に ホケノ山へゆけるだろうか・・・



纏向の空を悠然と飛ぶ赤とんぼ 秋も もうまじかです 2012.8.23.



纏向の空に夕だち 生駒から超スピードでやってきた雨雲が巻向に雨を降らす

3.6. 雷鳴轟くホケノ山古墳から箸中へ



穴師の山裾から箸中ホケノ山古墳へ 纏向の扇状地を南西へ下る



穴師から南西に下ってきて 巻向川の岸に出る





前回来たときは草ぼうぼうで マムシがでると驚かされたホケノ山古墳 綺麗に草が刈られ、てっぺんに登れました



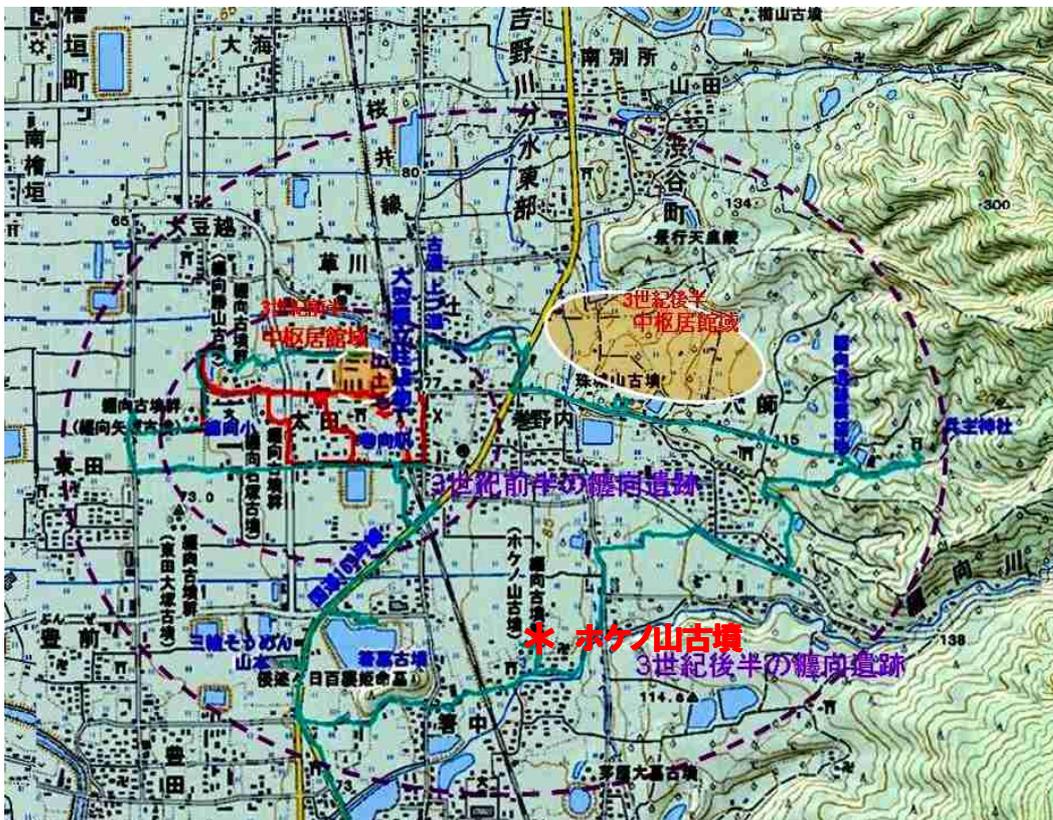
ホケノ山古墳から北西側のパノラマ 纒向古墳群を眺める



ホケノ山古墳 南 & 南東側の展望
山や丘に邪魔されない纒向全体の展望はホケノヤマ古墳が一番でした



【 ホケノ山古墳 墳丘の上から眺めた 360度の纏向遺跡 遠望 】





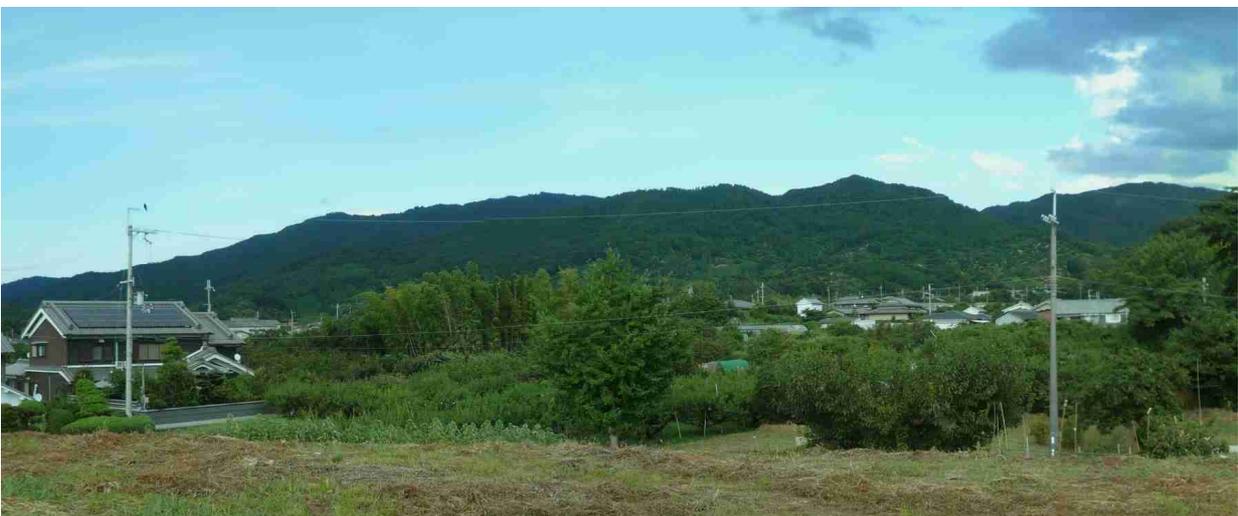
箸墓がある箸中地区 西方向



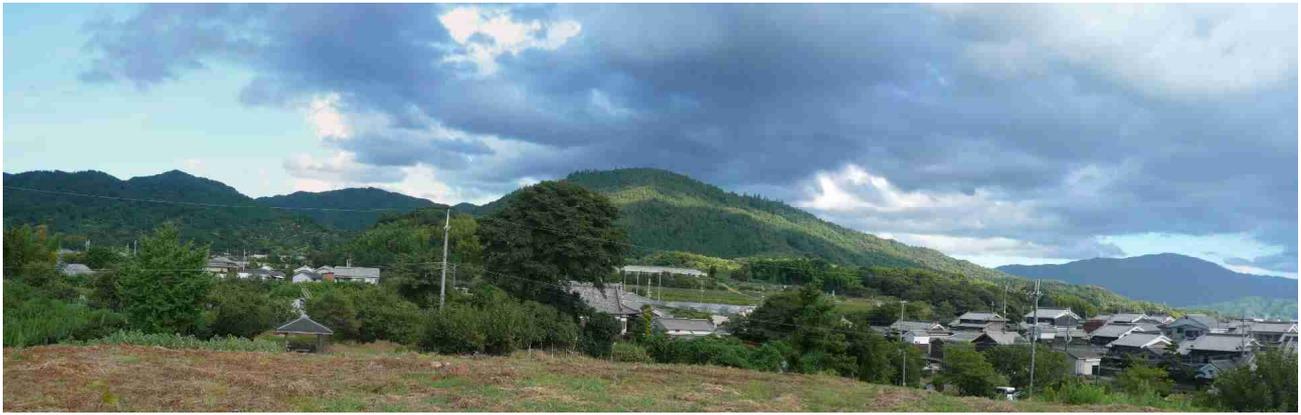
纏向小・県営住宅・纏向古墳群などが浮かぶ東田地区と3世紀前半の中枢部纏向大田・辻地区周辺遠望 北西方向



中央右に巻野内石塚山古墳が見える太田・辻地区から巻野内の西側地区 北方向



後ろの山並みの下見えていないが3世紀後半の中枢部巻野内の東側地区と穴師 北東方向



左側に穴師の集落の一部が見え、右側に三輪山をバックに箸中の東側集落 南東
【 ホケノ山から見えない 穴師の丘の上から眺めた總向の全景 】



ホケノ山古墳からは山に隠れて眺められない北東側 3世紀後半纏向の中核地区 巻野内 尾崎花地区

なんとか 雨にも間に合って 素晴らしい ホケノ山古墳からの景色をながめることができました。
 今日一日の満足感に浸りながら 箸墓の横を通過して 国道169号線箸中のバス停へ



箸中の集落 ホケノ山古墳から西へ 箸墓の南側を国道169号のバス停へ下ってゆく



まだ 何も謎は解けませんが、纏向遺跡はまだ謎の面白い遺跡 景色はいいし、ゆったりと歩いて
 古代のロマンにイメージを膨らませるのにはうってつけ。

「纏向遺跡の人の顔が見えないのですが・・・ また、鉄器ももっと出
 ません???' 」と訪ねた桜井市埋蔵文化センターで「我々も本当に不思議
 ですが、集落跡がでていません」と聞いて頭の中すっきり。

纏向はまだ 古代のロマンを掻き立てられる場所。

わたしの妄想ですが、縄文人が作ったストーンサークルの古墳時代前期版
 が纏向では????と・・・

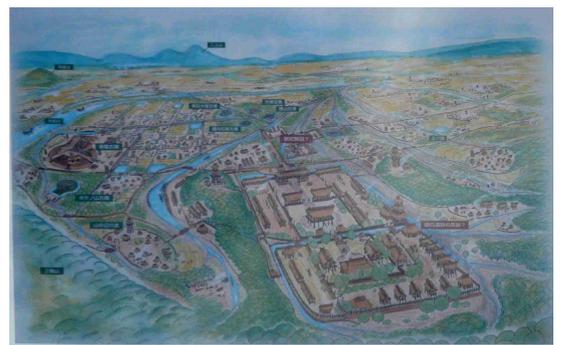
「纏向は この扇状地全体が連合諸国共同の宮殿-祭祀の場で
 一般人が 足を踏み入れなかった禁則の場だった。

そのとてつもない大きさが見えず 人の姿がみえないのでは???'と。

この時代 まだ 祀り 祭祀が国を治めてゆく基本であつたらう
 そう考えると 連合した国々がこの祭祀の場建設に人・資材を多数送
 り込んで この纏向を建設。

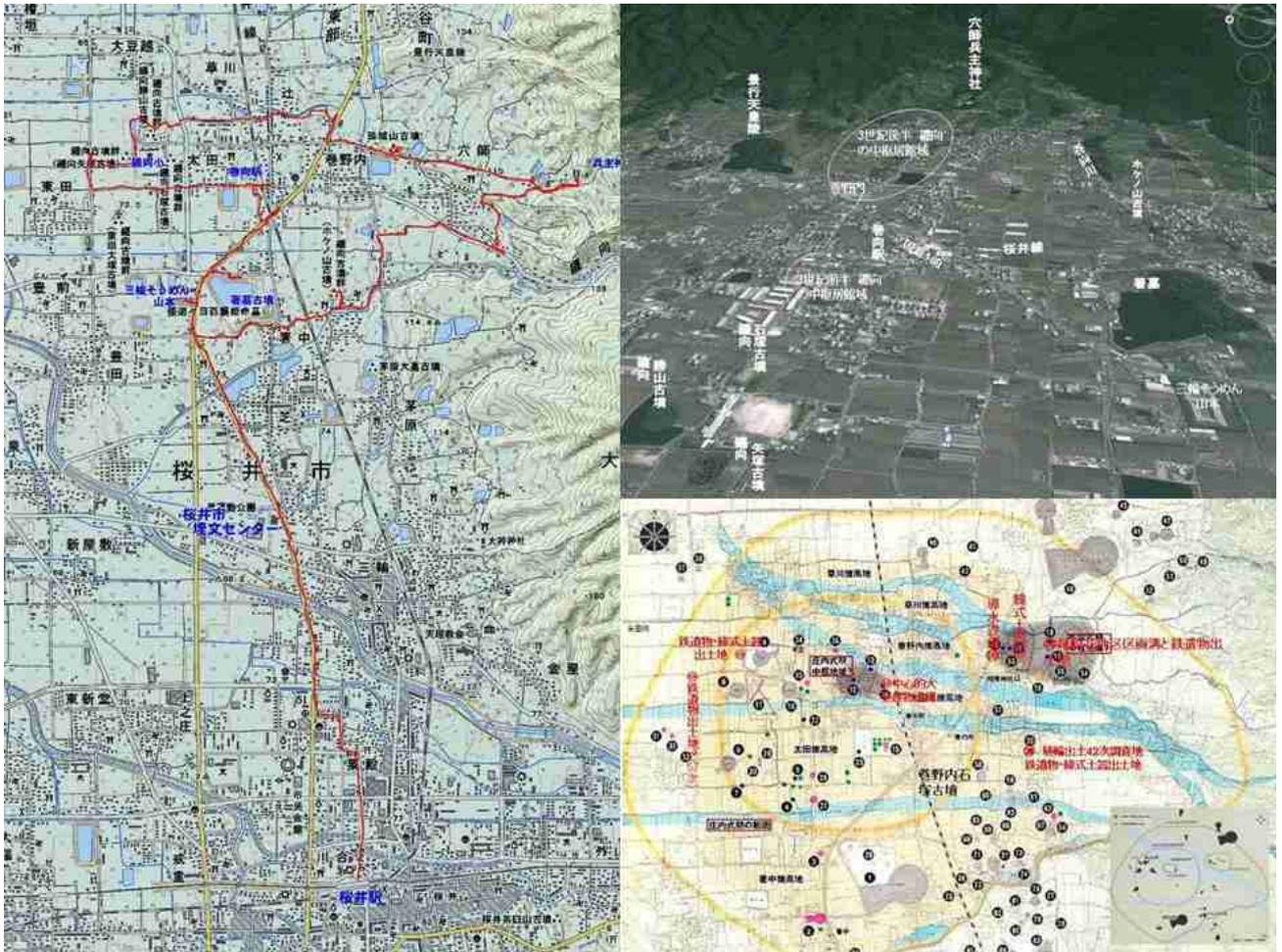
これが本当なら都市の謎もとけるし、スケールの大きさはすごい 」

まだまだ 面白いことがありそうな 纏向 続けて通ってみようよと・・・。



纏向遺跡 ※本図はイメージ図であり、必ずしも考古学的調査、資料に基づいたものではありません。





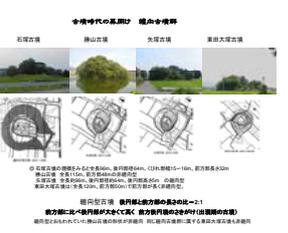
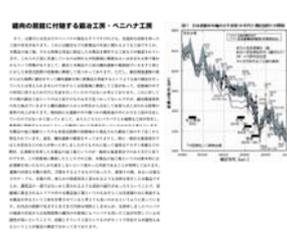
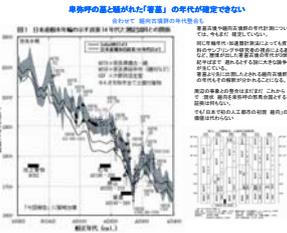
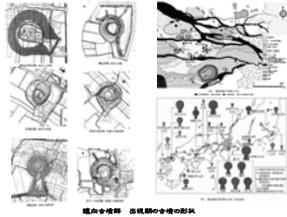
【参考】

【和鉄の道】

1. 鉄のモニュメント 奈良 三輪山 大神神社の大鳥居
 久しぶりに巻向・三輪 三輪山山裾を歩く 2011. 8. 2.
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/11iron09.pdf>
2. 初期ヤマト王権を支えた物部氏の本拠地「布留遺跡」再訪 Walk 2012. 5. 19.
 今まで 布留遺跡に抱いていたイメージが随分 変わりました
<http://www.infokkna.com/ironroad/2012htm/iron8/1206furu00.htm>

【主な取りまとめ資料】 主にインターネットならびに纏向遺跡が記載されていた図録より 資料取りまとめました

1. 桜井市教育委員会 橋本輝彦氏 講演レジメ「日本における都市の初現 纏向遺跡」
2. 纏向古墳群・箸墓の年代測定についての資料 新井宏氏・鷲崎弘朋氏・歴博 資料&図
3. 村上恭通「古代国家成立の過程と鉄器生産」
4. 橿考研博物館「三国志の時代 2・3世紀の東アジア」展図録
5. 桜井市纏向学習センタ home page 纏向遺跡
http://www.city.sakurai.nara.jp/maki_c/info/iseki.html





ナガノム全境から北西方面のペナク 堤向の堤防を眺める



ナガノム全境から北西方面 堤向堤防 全景



堤向の奥にアサガ 北側から北西方面まで広がる堤防が堤向に開き特化す



穴野 長五郎神社 稲殿



ナガノム全境 堤向 堤防の風景



穴野の山麓から中ナガノム全境へ 堤向の堤防風景を眺める



ナガノム全境から堤向の全景



堤向全境 北ナガノム全境の奥に北山



穴野から堤防に下りてきて 堤向の奥にみる



穴野から堤防に下りてきて 堤向の奥にみる



【 穴野山麓 堤向の奥に眺めた 300 度の堤防風景 建築 】



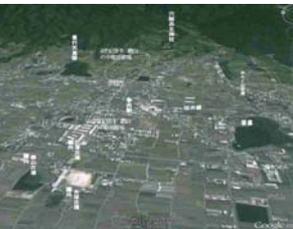
堤向全境 北ナガノム全境



堤向全境の奥に下りてきて 北ナガノム全境へ



堤向の奥を北西から眺める 穴野 堤防に下りてきて 2012.8.23.



堤向全境 北ナガノム全境



堤向全境 北ナガノム全境



ナガノム全境から堤向の風景【2】 穴野



堤向全境 北ナガノム全境



堤向全境 北ナガノム全境



堤向全境 北ナガノム全境



ナガノム全境から堤向の風景【3】 北野



堤向全境 北ナガノム全境



堤向全境 北ナガノム全境



堤向全境 北ナガノム全境



ナガノム全境から堤向の風景【4】 北野



堤向全境 北ナガノム全境



堤向全境 北ナガノム全境



堤向全境 北ナガノム全境



ナガノム全境から堤向の風景【5】 北野



ナガノム全境から堤向の風景【1】 北野